

若者たちの“夢”が十勝の未来を創造する

芽室町 十勝未来創世プロジェクト

いつの時代も「最近の若者は…」と若い世代を否定的に嘆く大人たちがいる。しかし、「こんな熱い若者が十勝にいたのがうれしい。十勝は安泰だ」と地元の大人たちも熱い支持を惜しまないのが「十勝未来創世プロジェクト」。彼らの力なら十勝、北海道、日本、世界の未来へと紡ぐ夢も成し遂げるのではないかと——そんな期待感も膨らむ。

このプロジェクトは、その名前の通り、メンバー一人ひとりの夢を叶えることによって十勝の未来を創造することを目的に立ち上げたものだ。農業者、会社員、編集者など異業種で働く30歳前後の若い男女11人。

プロジェクトチームが何かを成し遂げようという芽は2011年12月9日に遡る。「グローバル十勝異業種交流会」—十勝の若者15人が集まり、「僕たちがすべき産業間の連携とは何か？」をテーマに話し合っていくうちに、次第に「未来の十勝のためにこうしたい」という夢を語り合う場になっていった。

「この貴重な出会いをムダにしてはならない。次につなげなければ…」と参加した芽室町の牧場に勤めている柏葉真伸さんが再度集まる機会を設け、翌年1月7日、温泉に泊まり込んで異業種交流会が継続さ

れた。そしてこの日、柏葉さんを代表とした十勝未来創世プロジェクトが発足することになった。

メンバーはそれぞれ夢も個性も違う。しかし、人々を豊かにして十勝の活性化につなげたいという志は同じ。個性という横糸が志という縦糸と交わることで、それこそ化学反応を起こすように可能性の幅が大きく広がった。



異業種交流会からプロジェクトはスタートした

■ 『夢の本』を未来の子供たちに

地元十勝に対する思い入れが強い彼らにとって十勝の魅力とは何なのか？

メンバーで地元の書店に勤める高橋智信さんは「十勝の魅力はひと。その“ひと”が豊かな十勝が好きだということは、メンバーみんなが根っここの部分として持っていると思う」と語る。

その十勝最大の魅力である「ひと」の強みは、様々な職業や能力を持った若者が力を合わせることで発揮できる。このプロジェクトチームは、目的である十勝の未来を創造するために、次に掲げる1章から3章までを段階的に進めていくという。それぞれの章の内容はこうだ。

第1章、メンバー全員が夢を叶えるために使う『夢の本』を創り上げる。

第2章、その『夢の本』を片手にメンバー全員がそれぞれ自分の夢を叶える。

第3章、その夢を叶えたら自分たちが使っていた夢の本をもとに次世代の子供達に夢の大切さを伝える『夢の本～最終版～』を創り上げ、メンバーの一人が勤める地元の書店から発信する。

『夢の本』の中身について柏葉さんはこう語る。『自分の夢が明確に書かれている』『壁にぶつかった時に奮起できる』『25年間道しるべとなる』『若い時の初期衝動に立ち戻ることができる』などの項目がすべて網羅されていることが条件です」

この本の完成予定は2014年の5月5日、最終版は2039年5月5日までに創り上げて発信することでこのプロジェクトは終了する。

彼らの志の高さに加え、若さならではのフットワークの軽さも手伝って、立ち上げてから短期間で外にも内にも活動領域は一気に広がっている。

設立した年の6月には、「畑の朝活」と

いう坂東農場(芽室町)のスイートコーン畑の真ん中で朝食をとる活動を始めた。次の年にはその畑にテラスを作り、この朝活を初めとする様々な活動の拠点として利用、畑の持つ可能性を発掘する場として活用している。

「コンビニで買ったパンで済ますような味気ない食事ではなく、みんなで畑の恵みに感謝しつつご飯を食べたら美味しさは格段に違います。それに加えて十勝の魅力である畑のど真ん中で食べたらとワクワクした思いで始めました。心がとても豊かになっていくんですよ」とメンバーの按田みさきさん。



「24時間夢会議」では「十勝から世界に絵本を届ける絵本作家になりたい」など夢についてとことん語り合った

同じ年の12月には、「24時間夢会議」という、その名の通り24時間かけてメンバーの夢について話し合うユニークな試みも実施した。メンバー一人ひとりの夢を全員の前で発表することで、それぞれの夢がより明確になることを目的にしている

「具体的に夢を実現するまでのスケジュールを説明しようとする、自分の夢に対してもっともっと深く考えることになる。夢を語った人に自分は何ができるだろうと

か、それぞれの夢を知ることによって自分の生き方も変わってくる気がします」(按田さん)

■ 十勝の農と食を伝える

2013年2月22日から24日の4日間にわたって開催された「アジア・イノベーションズ・ローカル・フォーラム(AILF)」にも参加。これは、アジア各地の20~30歳の若者約100人が帯広に集い、自分たちが暮らす地域の10年後の姿をしっかりとイメージし、その実現を目指して熱く語り合うイベント。



十勝の魅力である畑の真ん中で味わう朝食は別格

メンバーは、農業チームと商業チームに分かれ、フォーラムのメインである「俺」分科会に参加。この分科会のテーマである『「俺」の夢・地域作りへの思い』について「俺」(発表者)の夢や志、ビジョンをそれぞれのチームが発表した。このときに農業チームを「NAFLL」(Nature Agriculture Food Literacy and Life)という名で設立した。

このNAFLLのプロジェクトとして、

同年5月には畑の景観に新しい価値を具現化するため、音更町・佐藤農場のナタネ畑に畑の散歩道や展望台を作り、1日限定でライトアップも行った。この会場には、20日間で2000人ももの来場者が訪れたという。

さらに6月には、めむろ町民活動支援センター(NPO 法人めむの杜運営)がめむろまちの駅で開いた食をテーマにした「夏至まつり&キャンドルナイト」で、循環型農業をテーマに体験コーナーを設置。農業や食材について自ら生産するナタネや小麦を題材に、メンバーたちが乳牛の着ぐるみを使ったり、〇×クイズをするなどしてわかりやすく解説した。「圧搾機を使ってナタネから油を絞り出す実演もしました。特に子供たちの反応はこちらが驚くほどでした。もともとの食材がどんな形なのかを知らない子供が多いので、本当の素材を見ることで、子供たちも食の大切さや魅力を感じ取ってくれたのでは」とメンバーで、農産物加工販売会社の役員を務める伊藤英拓さんは語る。

2014年の2月、NAFLLのメンバーは循環型農業や十勝の未来につながることを学ぶ目的で、9日間に渡ってキューバを旅した。視察テーマは「未来につながる新しい『豊かさ』のカタチを創造~人と資源の有機的循環モデルの構築による十勝農業におけるイノベーション~」。

この旅は、帯広市のフードバレーとかち推進協議会が実施する「十勝人チャレンジ支援事業」という新たな取組み(調査研究)を支援する事業に応募し、採用されたことで実現した。

こうした色々な活動は、まとまりがなく目に見えるような直接的な効果をもたらしているわけではない。「それでも軸は一本通っているのです」と柏葉さんは語気を強める。「個活動の幅が広いので一見まとまりがないように見えますが、夢の実現のためには色々な活動をしなければならないのは宿命です。その夢の集合体こそが十勝の未来の創造につながると皆信じています。そして夢の大切さを未来の子供たちにも伝え、バトンをつなぎながら十勝を持続的に活性化させていくことがプロジェクトの大きな夢なのです」

前述の 24 時間夢会議では、体力的にも精神的にも疲れ果てた中でもメンバー全員で山登りに挑戦した。しかもこの日は大雪。なぜ、そんな無謀なことまでするのか。

「十勝の開拓者である依田勉三がつくった『晩成社』の人たちは大雪の日にも山を登り、十勝平野を眺めたのでしょう。自分たちも同じように行動することで『次は自分たちだ』という気持ちを奮い立たせるためでした」(柏葉さん)

北海道から開拓者魂が失われてから久しい。でも、十勝という広大なフィールドで培われたスケールの大きなプロジェクトは、消えかかった開拓者魂の灯を再び勢いづかせ、やがて大きな火となって十勝の大地を照らしたすに違いない。



■ 連絡先

〒082-0001

河西郡芽室町平和西 15 線 50 番地 1
十勝未来創世プロジェクト

代表 柏葉 真伸

TEL : 090-1649-0157

Email: masanobu0825@ae.auone-net.jp